

令和3年—4年度期 第3回 世田谷区子ども・青少年協議会 会議録

■開催日時

令和4年3月31日（木）14時30分～16時30分

■開催場所

ダイ・ホーム世田谷

■出席委員

入澤充 志村健一 阿久津皇 高橋昭彦 中山みずほ 田中優子 林大介

明石眞弓 岡崎美恵子 藤原由佳 勢能克彦 渡邊 明宣

廣岡武明 下村一 奥村啓 新井佑 近藤三知香 丹羽有彩

■事務局

子ども・若者部長 柳澤純 児童相談所長 土橋俊彦

若者支援担当課長・子ども育成推進課長 山本久美子

児童課長 須田健志 児童相談支援課長 木田良徳

生涯学習・地域学校連携課 谷澤真一郎

■会議公開の可否

公開

■傍聴人

0人

■会議次第

1 開 会

2 議事

(1) 第4～6回小委員会活動報告

(2) 「若者とともに変わる地域～若者の視点で」実現に向けたモデル事業の実施について

3 その他

4 閉 会

午後 2 時30分開会

○山本若者支援担当課長 定刻になりましたので、令和 3 年－ 4 年度期第 3 回世田谷区子ども・青少年協議会を開会いたします。

本日は、お忙しい中、また、コロナもまだ収束し切っていない中にご出席いただきまして、ありがとうございます。議事に入るまでの間、事務局として進行を務めさせていただきます若者支援担当課長の山本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開催に当たりまして、子ども・若者部長の柳澤より、一言、ご挨拶を申し上げます。

○柳澤子ども・若者部長 こんにちは。子ども・若者部の柳澤でございます。皆様におかれましては年度末のお忙しい中、第 3 回子ども・青少年協議会にご出席いただきまして、どうもありがとうございます。また日頃より、区政に対しまして多大なるご尽力を賜りまして心より感謝申し上げます。

この子ども・青少年協議会は 2 年間の任期でお願いしておりますが、これで折り返し点を迎えようとしてございます。今期は「若者とともに変わる地域～若者の視点で」というテーマでご検討いただいておりますが、小委員会の皆様におかれましては、協議会での議論を基にさらに検討を進めていただいているところでございます。

本日は、12 月の協議会以降、小委員会における検討状況を共有していただきまして、現状の課題や今後の取組につきまして、さらに議論を深めていければということで考えてございます。本協議会の検討が、新たな若者支援施策の課題を見据えまして、次への新たな一歩となることを大変期待しております。

本日も委員の皆様の活発なご議論をお願いしたく、よろしくお願いいたします。

○山本若者支援担当課長 ありがとうございます。

本日の協議会の出欠の状況でございます。事前に、大原委員、森岡委員、臼井委員、田谷委員、鈴木委員、増田委員の 6 名からご欠席の連絡をいただいております。今遅れていらっしゃるのが、3 名になりますが、2 分の 1 以上の委員の方にご出席いただいておりますので、本日の会議は成立しております。

協議会でございますが、会議録を作成するに当たりまして、正確を期すため速記者を出席させることをご了承願いたいと思います。また、ご発言の際にはマイクをお使いいただきますようにご協力をお願いいたします。

本日の資料は、次第に記載のとおりでございます。協議会の進行に合わせてご紹介させていただきますが、不足、不備がございましたら職員にお知らせいただければと思いま

す。読み上げは割愛させていただきます。

では早速、本日の議事に移らせていただきます。これより先、会長へ進行を引き継がせていただきます。会長、どうぞよろしくお願いいたします。

○会長 皆様、こんにちは。年度末、慌ただしく、私の大学も今、朝から辞令交付式を終えて慌てて吹っ飛んでまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の議論の到達点でございますけれども、2つの小委員会がモデル事業を実施しております。その検討状況を共有して、現状の課題や今後の取組について活発な意見交換をしていただきたいということでございます。

ちょっと話が変わるんですが、先日26日に、世田谷区が若林小学校の跡地に設立した教育総合センターの見学と、区長との懇談会、教育委員会の部局との懇談会に行っていました。そこに世田谷区内の都立高校、私立高校、大学の関係者が一堂に集まっているいろいろな話、高校からの訴えを聞いたりしたんですが、ある都立高校の校長先生から、城山ほっとスクールから高校生を受け入れているという報告がありました。城山ほっとスクールも見てきたんですけれども、大変立派な施設になっており、子どもたちが上履きを持参してそこに置いていると。もう指定席もあるんだなんていう話を伺ってきました。

また、ある都立高校の校長先生は、中学校時代から不登校だった子どもたち6割を集めているというんです。その子たちが高校に入るにしたがって徐々に不登校がなくなってきたという話もありました。このような高校にも、我々の動きを紹介しながら連携していけたら、教育と福祉の統一的保障というところにつながるんじゃないかなと思います。

ということで、早速本日の議題に入っていきたいと思います。どうぞ活発なご議論をよろしくよろしくお願いいたします。

それでは初めに、2つのモデル事業案の検討の経過について、志村委員長からご説明をお願いいたします。

○副会長 皆さん、こんにちは。小委員会の経過をご説明させていただきます。この後、それぞれのご担当の委員の方に詳細な報告をしていただきますので、私からはざっくりとした報告をさせていただければと思います。

昨年末、12月に第2回の協議会が開催されまして、学校、商店街の2つのモデル事業についてご提案して、委員の皆様から様々なご意見を頂戴いたしました。その中で、時間は限られているけれども、少しでも、小さな取組でも構わないので、実施してみてその次のステップを考えていくというご提言をいただきまして、何とかできることはないだろうか

ということを進めてまいりました。非常にタイトなスケジュールの中、区役所の職員の皆さんには本当に丁寧に動いていただきまして、おかげさまで2つのモデル事業を進めることができたということ、まずご報告しておきたいと思います。

1つのモデル事業が学校チームに関してです。学校チームは、子どもたちにとって自宅の次に身近な場所である学校の中に、地域の大人を含めて外部から多様な人たちが参加する校内カフェというものを実現したいと、多くの子ども、若者に非日常の場を届けることができるのではないかとということで検討してまいりました。しかしながら、新型コロナウイルスのオミクロン、またオミクロンの亜種というようなものが猛威を振るいつつあり、なかなかカフェという形態では難しい状況が続いていました。こういう状況の中、希望丘青少年交流センター「アップス」のセンター長の下村委員を中心に、船橋希望中学校の校長先生と相談していただき、出張アップスという取組を進めていただきました。この出張アップスでは、アップスの職員が学校に出向いてユースワークをするという青少年交流センターの事業ということですが、学校側からぜひ地元の方にも来てもらいたいという意見をいただき、子ども・青少年協議会委員も同行することになりました。

そして、下村委員が船橋希望中学校の校長先生と調整を進めまして、本当に1週間前です。3月22日に第1回出張アップスを実現することができて、その際にテーブルゲームやドリンクなどを持ち込んで生徒さんとコミュニケーションを取ることができたと伺っております。この詳しい様子は、後ほど学校チームよりご報告をいただきたいと思っております。

そして、もう一つが商店街チームの検討経過です。商店街チームでは、第一歩の取組として商店街の中で何ができるかについて、これは様々な可能性がありますので議論を続けてきました。限られた時間の中でできることということで、まずは若者の考えを知る、アセスメント的に、若者と一緒にまちあるきをするという企画が立ち上がりまして、3月の実施に向けて企画を進めていただきました。当然このモデル事業に関しましては受入先というものが必要になるわけですが、このことに関しまして、前期のご協力者であるしもきた商店街振興組合の理事長と北沢おせっかいクラブの代表理事に、今期の協議会の検討状況をご報告するとともに、モデル事業の実施に向けて相談をさせていただいたところ、下北沢駅前の案内所の活用、小田急線や京王線の地域貢献の取組と連携の可能性のあることなどのご助言をいただきました。

そして、前回の委員会の中で、継続的な事業の担い手ということで委員の皆様からご意

見をいただいた際に、大学のゼミ等と連携できないかという意見がありました。そこで、日大文理学部社会福祉学科の久保田先生に連絡をいたしまして、すぐに打合せを事務局とすることができまして、久保田先生からは、4月以降、ゼミの中で個人的な研究テーマと本モデル事業の方向性が重なる学生がいれば継続的に一緒に活動できる可能性があるというお話をいただいております。また、3月のまちあるきについても学生さんに紹介をしていただきまして、久保田先生ご本人にも参加をしていただいたという次第になっております。

2月、3月の小委員会では、3月の下北沢のまちあるきに向けて検討を進め、このまちあるきの目的としては、とにかく一緒に歩きながらまちの魅力や課題をシェアして、モデル事業のアイデアの種を見つけることとしました。こちらで方向性を決めずに、若者の意見を吸い上げていくスタイルに徹する努力をしていただきました。若者のやりたい企画を応援していくことを目標として、具体的な準備としては、3月21日を実施日として決定し、若者委員に資料3のチラシを作成していただき、区のホームページで若者の参加募集等を行い、非常に短い募集期間ですけれども、6名の若者が応募してくださったということです。

この後、それぞれの委員の皆様からご担当いただいたモデル事業についてご報告いただければと思います。私からの概要説明は以上となります。よろしく申し上げます。

○会長 どうもありがとうございました。

それでは、学校チームの活動報告について、下村委員、近藤委員からご報告をお願いいたします。プロジェクターを使いますね。

○委員 学校チームの希望丘青少年交流センター、アップスの下村です。よろしく申し上げます。

この協議会で皆さんといろいろ議論してきた校内カフェですけれども、地域の方たちが学校の中に入って、学校とは少し異なる自由な空間の中で、地域の方と若者がいろんな情報交換をしたり、若者がこんなことを考えるんだというようなことを発言していただけるような、その基になるような空間をつくりたいなと考えました。準備としては、まず校長先生としっかりと打合せをした後、校長先生から職員にある程度きちっと理解を得たほうがいいということで、1回職員会議に出席させていただいて、趣旨を話させていただきました。

第2会議室という、ふだんは生徒が立ち入っちゃいけないお部屋なんですけれども、そ

ここに机とか椅子がいっぱい、余分なものが少し置かれているような空間なので、学校に少しリラックスした空間をつくるためには、何かと環境を変えられるような工夫が必要だろうなということで、アップスカラーの布であるとか、コミュニケーションのツールの一つとして、雑誌、漫画、それからボードゲーム、楽器等を持っていきました。当日は台車でガラガラ運んで、ぱっとセッティングしたというような感じです。

スタッフとしては、アップスのユースワーカーが私を含めて2名。それから、ここの中学校の卒業生で、今アップスの若者の運営委員会に参加してくれている若者、それから青少年協議会の委員でもある地元の方ということで近藤委員にもお越しいただいて、4人で当日伺いました。1週間前ぐらいから、各教室に22日の3時半から5時半にアップスがやってくるよという告知は貼らせていただいて、アップスに来ている子たちも、えっ、来るんだってみたいなのはアップスで少ししてくれていました。

当日は8名の方が参加してくれましたが、アップスのヘビーユーザーの子は1人だけ、あとは1回とか2回行ったことがありますみたいな子がいて、水泳部の若者と映画鑑賞部というクラブをやっている若者が割と多く来ていたというような感じです。この子たちは部活が始まる前に来だして、また部活が終わったらのぞいてくれる。しかも、その帰り際に物すごく盛り上がっているいろんな話を始めるというところがあって、やっぱりこういう帰り際の時間ってすごく大事にしなきゃいけないんだなというのは、改めて実感をしました。

それから、私も田奈高校の校内カフェを見たことがあるんですけども、その空間にできるだけ近づけるようにということで、飲み物についても、校長先生がお茶だったらいいですよというお話をさせていただいたので、お茶と紅茶のペットボトルの小さなものを用意して差し上げるような形にしました。それから、最後の小委員会のときに、そこが安心安全な空間なんだよということをきちっと若者に保障することが大事だということで、ここで起きたことは誰にも話さないことを書いたボードを用意しました。

高校の校内カフェとちょっと雰囲気が違うなと思ったのは、やはり中学生が忙しそうだというところが1点。それから、かなり興味を持って通りかかる子はいらんですけれども、部活に行く途中みたいな感じなので、でも、校長先生は、大分関心を持って見ている子たちはいたよということで、継続していくと随分変わってくるんじゃないかねということはお話ししていただきました。

それから、校内カフェのときには地域の人がいっぱい入っていて、それが魅力的に映っ

ていましたけれども、当日の様子でいうと、若いスタッフが行ったほうがいいなというのは思って、中学生は、やっぱり大学生とか、うちの若いユースワーカーのほうが話しやすそうだったかなと思いました。あと、入口を関心を持ってのぞくんですけども、悩んだのは、呼び込みするか。入らない？って声かけるのは難しいなと思って、あまり行き過ぎると逆に避けられちゃう雰囲気もありましたし、その辺はふだんの我々が接する若者とはちょっと違ってすごく難しいなと感じたところでもあります。

○委員 私は青少年協議会のモデル事業としてどういうふうに関わればいいかなということで、地域のサポーターとして出張アップスに参加いたしました。

まず、最初に参加するメンバーのティーさんと、ハーさんと、私はドタバタばあさんのみっちゃんとして、下村さんの進行の下にみんなで打合せをしました。それが私はすごくよかったなと思ったんです。私とティーさん、ハーさんは初対面で、一緒にそういう場をつくっていくためにはチームワークや何か共通のものが無いと難しいだろうけれども、すごく下村委員が配慮してくださって、今日の目的、内容、学校に対する配慮の点と、個人の言ったことは漏らさないということ、そこはちゃんとやりたいねという話をされて、そこで意思統一ができて、初めて同士でも、ご一緒にできるなという実感がありました。

それから、あの日はみぞれだったんですね。私は傘を差しながら荷物を持って行って、場の設定をしたんですけども、何をやるにも共通の意思統一、情報共有がすごく実施する側にも必要なんだなというのを本当にすごく思いました。

あとは、もう下村委員がおっしゃったことで、私たち自体がフレンドリーになったのが、雰囲気がよくなったのかなというのはすごく思いました。

私はちょっと狭いなと思ったけれども、下村委員は意外に広くてよかったとおっしゃったので、そんな狭さの会議室をみんなで、持ってきたテーブルクロスで和らげられたのでよかったなと思いました。

それから、ゲームも幾つかあって、やりましょうと私が初めてのゲームに誘ってくれて、一緒に教えてもらってやったり、最初は本当に全然来ないじゃんと思って、結構隅だし、誰か来るのかなみたいな場所だったんですけども、ウクレレを持ってきていらして、ピロンピロンと代わる代わる何気なくしていて、そういうのもいいなと。リラックス感が、安心感がよかったなと思いました。

そういうリラックスする雰囲気づくりも大事にしながら、消毒グッズだとか、入口の看板とか、あと、お部屋の中に注意を掲げるとか、その両方をちゃんとしている空間だった

のがよかったなと思いました。

あと、私が最終的に感じたのは、モデル事業として地域でやれるとしたら、学校という場所にほっとする空間をつくるのがまず第一かなと思いました。出張アップスはその紹介なんだろうけれども、もしも地域でつくるとしたら、ほっとする空間を地域の人たちが主催してつくる。その場に、例えば青少年交流センターとか、この間も、たからばこで活動しているユースワーカーの方とかが一緒にいたんだけど、そういう方がいることで活動の興味も出てくるみたいなほうがいいかなと。だから、私が地域でやるとしたら、そういう安心安全な、ちょっといい感じだからほっとしに行こうかな、子どもたちが学校の中でもあそこに行ったらほっとするからといって来てもらえるような空間づくりなら私はできるかなと。そこに、その活動を支援する専門の方たちが来ていて、気になる子には、ご紹介もできたり、きっかけづくりもできるというのだと、イメージが湧くかなと思いました。

子どもの権利条約はいろいろ条項がたくさんあって、確かに子どもの参画は物すごく大切なんですけれども、やっぱりそのベースに私は第31条の子どもの文化権、ほっとするか、余暇を楽しむとか、遊びを楽しむみたいなのがまず保障されないと、自分で何かをやる、自分の意見を言うという参画まではつながらないと思っています。私も文化庁の芸術家派遣事業でゴスペルの講師を学校にご紹介をしたんですね。そのときに、ゴスペルってうわっと歌うじゃないですか。そうしたら学校の先生が、「子どもたちに、『いいんだよはっちゃけて、マスクをしているけれどもマスクの中で歌っていいんだから、はっちゃけていいんだよ』と言うんですけれども、僕らの言うことは、はっちゃけていいとは受け取らないんですよ。こうやっちゃいけないとか、こうやらなきゃいけないという制限がある中で、心の底から楽しむということが先生の力ではなかなかできないんです。」とおっしゃっていました。それは学校の中に、ここでは楽しんでいいんだよとか、ほっとしていいんだよという空間をつくるというのは意味があるかなと思いました。

○会長 ありがとうございます。学校チームの他の委員の皆様からも補足やご意見があれば伺いたいと思いますが、廣岡委員、いかがでしょうか。

○委員 まず、出張アップス、お疲れさまでした。そして、お話を聞かせていただいて、まずは本当にモデル事業をやってみて分かったこと、見えてきたこともたくさんあるんだなと思います。

あと、学校の中でも、1回目なので興味関心があっても、その中でいきなりそこに訪れ



る子はなかなかいなかったかもしれないんですが、続けていく中でまた違う展開もありそうかなというので、本当に今後は楽しみですし、私も関わっていききたいなと思います。ありがとうございました。

○会長 ありがとうございました。ほかに、もしご質問等があれば伺いたいと思います。よろしいですか。

では、また討議のときにお話ししたいと思います。

それでは、続いて商店街チームの活動報告について、藤原委員からご報告をお願いいたします。

○委員 商店街チームの報告をさせていただきます。

実施いたしましたのは3月21日の春分の日です。22日ほどは寒くなかったんですけども、この日もかなり寒い中、下北沢の駅前に集合しました。「若者の視点であるく下北沢」というタイトルで、事前に若者委員の丹羽委員と増田委員、そして事務局の皆さんにチラシを作成いただきました。若者主体で地域を一緒につくっていきたいですね、新プロジェクト始動します、どうぞ集まってくださいというような呼びかけです。

当日6名の若者に新たに集まっていたいたんですけれども、内訳としては大学生が4名、高校生が2名、男性3名、女性3名という割合で、そこに若者委員の2名が加わって、8名の若者と大人たちが一緒にまちあるきを実施しました。下北沢の案内人として、ゲストとして、しもきた商店街振興組合の理事長、それから北沢おせっかいクラブ代表理事、下北沢出身の俳優さん、そして副会長のご紹介で、日大文理学部の先生にお越しいただきました。そして、委員と事務局の皆さんとで実施しています。

小田急と京王の駅前のところにまちの案内所があるんですけれども、そこで集合して、自己紹介と簡単なアイスブレイクをして、それから3グループに分かれてまちあるきをしました。若者が8名なので、若者2チームつくっています。若者4名に大人が3名、大人のほうが多かったのもう1チームは大人チームをつかって、若者より大人の数が多いのでプレッシャーをかけないようにみたいな配慮でこうしたチーム分けになりました。

ルートは、当日集まった人たちの若者の中で決めるということで、行ってみたい場所というのを書いていただいているんですけれども、古着とか劇場とかというのに加えて、まさに今、再開発されている下北沢の新しいエリア、シモキタエキウエとかポーナストラックを挙げられる方が非常に多くいらっしゃいました。それでまちあるきをスタートしています。

途中、東洋百貨店とミカン下北という、ちょうど昨日、オープンする前のところに、プレミアム公開じゃないんですけれども、皆さんで事前に見学させていただきました。東洋百貨店がミカンのほうにも出店されるということで拝見しました。東洋百貨店の代表からお話をいただいたんですけれども、若い人の出店の現状のお話をメインでいただきました。出店するとか、起業するというのはすごくお金がかかるんですけれども、100万円ぐらいで出店が可能みたいな、具体的なお話は非常に刺さったなという感覚がありました。

このまちあるきでは、私たちが知りたかったことというのは、若者が商店街とかまちをどう見ているんだろうという、なかなか多世代交流とか若い人が地域に来ないという課題に対して、魅力的なまちってどんなことなんだろうというのを知りたかったので、スマホで、下北のまちを歩きながら魅力と思った風景を撮ってきていただくということと、課題だと思う風景を撮ってきてくださいとお願いをして、振り返りで、最後にその写真を見ながら、どういう観点で見ているのかというのをみんなで共有していきました。

北沢タウンホールに帰ってきてからの振り返りの時間で、スマホの端末をつなげてプロジェクターで表しながら、「この写真はですね」と言って、皆さんがどういう点が魅力的だったかみたいなことをプレゼンしてくださいました。

魅力として挙がったものを、資料2にも詳しく書いていただいているんですけれども、古いものと新しいものの融合とか、親しみと洗練があることみたいなキーワードがありましたし、あと、古着は全部700円みたいなのが好きとか、サウナが公園にあるとか、ポーナストラック近くにすてきな保育園が今できているんですけれども、こういうのがあると子育てしたくなるよねとか、緑が多い、道がきれい、ベンチがある、空が見える景観、開放感が好きという意見、それから、これがあるから下北沢って好きと言えるような大好きなお店があるというのも、商店街に行きたくなる要件だよというお話がございました。

課題としては、治安です。狭い道、車の通行があって危ない、路上飲み、たばこのポイ捨て、今、線路街は非常に観光客でにぎわっているんですけれども、地元の人が行きづらくなるんじゃないかとか、あとフェンスがある場所とか、おしゃれそうだけれども入れないとか、自分が拒絶されているようなエリアは何か課題があるし、ちょっと苦手みたいな意見。あと、まちピアノもいいんだけども上手い人しか弾けないとか、似たような意見で、シモキタカレッジという新たなコンセプトの寮ができていますけれども、コンセプトはいいんだけども、みんなが入居できるといいなと。拒絶されたくないじゃないですけれども、みんなにオープンに公開されるといいな、門戸を開いてほしいなという意

見。あと、まちあるきをしながら不動産広告が目に入ったが、1億3000万円と書いてあった。ブランドがどんどんよくなって魅力的になるのはいいけれども、若い人は買えないし、住めなくなるんじゃないかという非常に本質的なご意見などもありました。

こうしたセッションの中で皆さんで共有できたこととして、2つぐらいあるんですけれども、どの世代にとっても下北沢は若者のまちだよねという、結構けだし名言みたいなことを共有できた。どの世代にとっても魅力的な要素が下北沢にある。その1つとして、古さと新しさの融合とかがまちにあるというのは、世代問わずみんな好んでいたなというのを共有しました。

その後、若者がやってみたいことというのを聞いていきました。まず、俳優の方は、ご両親が衣装家さんで、たくさんの衣装を保有されていて、その衣装をどうしようと。社会に還元したいんだけど、単に売り買いするだけじゃない何かよい方法を考えたいということをもと提案くださったんですね。誰でも自由に服が選べるようなこと、ほかの皆さんから、服の歴史を体験しながら学ぶ場だったりとか、古着のコーディネートを提案して下北沢を古着で歩いてもらうような古着の貸出しセットプランみたいなのもできそうだよねみたいな意見に広がりました。

あと、先ほどの100万円で出店というお話が印象的だったと高校3年生の人がおっしゃっていて、何か好きなことをやってみたいと。それから、駅前広場で催し物みたいなものから始めてみたい、そういうのをやるとしたら、若者同士で支援し合えるようなのがあったらいいなみたいな意見もありました。

変わったものを売るとか、ハードルを低くできるといいなとか、下北沢には洋服屋さんがたくさんあるんですけれども、古着屋さんも、もっとカテゴリやテーマを絞って、そのテーマのお店がエリアごとに集中しているともっと魅力的なまちになるんだけどもとか、あと、売り買いじゃない交流の場をつくりたいというご意見も複数ありました。それがあつたら何をやりたいですかと伺うと、ご飯を出したりとか、温泉とか、足湯とかと申してくださいました。

それから、テーマを絞って興味のある人が集まれるきっかけなんかをつくってみたいというご意見。それに関連して、マッチングアプリが今すごくはやっているんですけれども、ペアになる、2をつくるのではなく、3をつくりたいという、やりたいことのマッチングで3人以上が集まれるようなのはどうかなと。あと、1人の参加者が、まちあるきをしていて小学生に出会わなかったという、私も気づかなかったんですけれども、言われて

みればという大発見をしてくださっていて、小学生が集まれる場所をつくってみたいというご意見がありました。あったとしたら何をやりたいですかと聞いたら、サッカーを教えたりしたいですというようなご意見がありました。

ということで、想像していたよりちゃんと意見が出てきたかなと思うんです。多分これはやりたいことのシードで、種の段階だと思うので、これらを踏まえて、この先一緒に議論していきましょうということでこの会は終わっています。一遍4月に早速に会議を開きましょうということで現状進捗しています。

報告は以上です。

○会長 ありがとうございます。伺っていて、若者には果てしない可能性があるんだなということが伝わってまいりました。商店街チームの他の委員の皆様からも補足やご意見をお願いしたいと思います。商店街チームで若者委員が活躍していただいたということで、まずは若者委員の皆様からお願いしたいと思います。といっても、お一人しかないんですが、お願いします。

○委員 私は、まちあるきに参加してみて、参加してくれた若者委員の2人以外も結構やりたいことが明確になっているなという印象を受けました。一緒にまちを歩いていても、私、こんなことをやってみたいんだよねとか、下北沢のこんなところが今問題だと思うのをごんごん自分から積極的に話してくれたなという印象があります。私自身は、まちあるきに参加者として参加してみて、もともと下北沢はよく友達と一緒に行ってたんですけども、それでも知らないところがたくさんあるなと思いました。多分、今まではインスタとかでお店を探して、その目的地に行くというだけだったんですけども、まちあるきという視点にしてみると新たな発見がたくさんできたかなと思います。本当に代官山みたいな白くて開放感があって、下北ってこんな感じになったんだと、まちあるきをしてすごく驚きました。まちづくりってこうやって人の力によって新しい大きいものがつくれるんだということに驚いたという感想があります。

新たな発見というと、藤原委員もおっしゃってくださったんですけども、昔と今が同じ空間に混在しているというのは感じていて、新しいきれいな場所に若者が行こうと思って下北沢に行ったら、同じ空間に、ちょっと昔ながらののれんとかが汚れているような中華があって、そっちもちゃんと若者にぐっと刺さるようなお店になっていて、そういう古さと新しさが混在しているところが下北沢が若者に人気の理由なんじゃないかなと思いました。

それで、今日は増田委員がお休みということで感想をいただいているので、ちょっと読ませていただきます。

まちあるきには気軽に参加する方が多いのではないかと考えていたのですが、実際に参加してくださった方たちは、自分のやりたいことや企画に参加した目的がはっきりしていて驚きました。振り返り際には様々な視点から新しいアイデアがたくさん出て、若者を巻き込みながら活動することの必要性を実感できました。大人が若者の話を聞く機会になるだけでなく、若い人たちにとっても大人と話すことを通して考えを深めることができるチャンスだったと思います。今後は、今回参加してくださった方たちに加えて、新たな若者も巻き込むことや、継続的に参加してもらえる体制づくりが必要だと感じましたということです。

○会長 どうもありがとうございました。それでは、区民委員からいいでしょうか。

○委員 私は残念ながら大人チームに交ざって歩いたんですけども、大人チームとして歩いていると、やっぱり古いものがあるとほっとする自分がいるというか、あまりにもプチ代官山はちょっとなじめないなという感じがありました。あとは、下北に住んでいる若者がいたんですけども、滅多に下北には行かないと言っていました。なぜと聞くと、やっぱり人が多くて何かごちゃごちゃしていてなんか嫌だという感じだったんですけども、一緒に歩いてみて新しい発見をされたので、そういう住民の方も巻き込みながらまちをもう1回見てみることはやっぱり大事だなという感じがしました。

あとは、土地の有効活用ができていないなというのがすごく目立ったので、何かそこをこのモデル事業でも使えたらいいよねという話が出ていました。なぜ有効活用ができないのかというと、いろんなセキュリティとかごみの問題があって、管理する人がいないと開けられないということだったんですね。だから、管理する人を誰か若者が担えるようになったら、もうちょっと有効活用できるんじゃないかなというアイデアもありました。

お話にも出たんですけども、どうしても古着とかというと結構お高いんですよ。何千円もするような古着で、若者が自由に購入できるようなものがないので、先ほど言われた衣装を取り扱っている若い方なんですけれども、やはりお金が介在しない交流として、若者が興味がある古着を使って何かできたらいいなということで、そこは事業化をしたいと。ただ、ボランティアではなくて事業化をして、1つのアイデアとしてはコーディネートをして、大人からはお金を取って、大人から頂いたお金を若者に還元するとかという、そういう新しいアイデアも出ました。

でも、そのアイデアが出たのが、発表のときだけじゃなくて、発表の後に少し若者と話しする時間があったんですけれども、やっぱり何気ない話の中で一緒に話をしているうちに、こうだよ、ああだよ、これもいいよねという話が湧いて出てくる。そういうことがやっぱり必要だなと思うので、多分学校のカフェも同じことが言えると思うんですけれども、何か目的意識ということではないんですけども、何となく話をしていくうちに自分にはないものを見つけたりとかということが、若い人にもすごく必要だし、私たち大人にも必要だなと思って、今このコロナの中でリアルで会う機会がないので、やはりリアルはすごく大事な発見が生まれる場所だなというのを改めて感じました。

○会長 ありがとうございます。それでは、岡崎委員、よろしいでしょうか。

○委員 もうほとんどの感想が出て、私が付け加えることはあまり思い当たらないんですけれども、私は今期からこの会に参加することになり、何度か議場の意見は聞いていたんですが、どうも出口が見えないというか、全体の構想は理解できるんですけども全体がつかないみたいなもやもや感がありまして、当日を21日と設定されてしまって、もう日にちもないなという中でとても心配になりまして、2度も下北沢の下見に行ってしまったんですけれども、会が始まったらもうわいわいがやがやとそんな心配をすっかり忘れるぐらい楽しく一緒に回らせていただきました。

振り返りの担当でもあったのでそれも心配だったんですけれども、本当に今回集まってくださった若者の皆様は、それこそ高校を出たばかりの方も活発に意見が出まして、私はびっくりしてしまったんですけれども、この先どういうふうにつながっていただけるかはちょっとよく分かりませんが、こういったメンバーが核になってうねりを起こして、もっと人数がたくさん集まれば何かできるんじゃないかなと、実際やってみてようやく出口も少しずつ見えてきたという気がしていますので、私の中ではもやもやから前に大分向いて前進している感じがするので、何かいい事業につながっていくんじゃないかという期待をしています。

○会長 ありがとうございます。それでは、続いてお願いできますでしょうか。

○委員 私も、世田谷区にもう何十年も住んでいるんですが、実は下北沢を全然知らなかったんです。事前に家族で下見に行ったりしました。当日参加しまして、若者が本当に積極的に参加していて、非常に貴重で有意義な意見を本当に持っているんだということを実感しました。以前別の委員会に出たときもそのような話がありまして、若者の意見というのは本当に大事なんだなと思ったのをまた再確認したという感じです。

よく保坂区長が車座を一生懸命されているという話を聞きますので、ああいうことは本当にいいことなんだなと改めて思った次第です。

実際若者の意見を聞くことによって、この小委員会のテーマ「若者ととともに変わる地域～若者の視点で」というのは本当に実現できるんだなと実感いたしました。具体的にどうするかというのは今後の課題だと思うんですけども、事業化して継続化、組織化していくということについて、課題はありますけれども、若者の意見をいろいろ取り入れていくことで、この小委員会の課題は実現できると思います。

さっきもちょっと出ていたんですけども、振り返りの時間が終わってからも、みんなその場所に残って、若者と立ちながらいろんな話をずっと続けるという流れになりました。本当に貴重な時間を過ごさせていただいたなと思います。

繰り返しですけども、「若者ととともに変わる地域～若者の視点で」というのが本当に実現できるんだなと実感いたしました。

○会長 どうもありがとうございました。若い人たちと付き合っていると自身も若くなるんですね。大学の教員って結構若いでしょ。何が言いたいかというと、私はもう今日で定年なんですけれども、若者と付き合うことによって、私たちがさらに活性化するんじゃないかと思います。

それでは、専門委員の奥村委員、よろしいでしょうか。

○委員 私も当日参加させていただいて、私も下北沢は全然分かっていなくて、当日は本当に一参加者みたいなところに入って一緒に回らせていただいたんですけども、やはり参加してくれた若者がすごく問題意識を持っていて、あと地元の人もいたりしたところでいろんな話が出てきていて、こんな意見を持っているんだというのをすごく率直に感じたというのがあります。

そういう若者の意見を今回聞けたというところで、私も商店街の取組のところを具体的にどうしていけばいいのかというのは、この間も考えていたところなんですけれども、今回お会いした若者がいろいろアイデアを持っていたり、こちらの意図も酌み取りながら、こういうのやりたいという話をしてくださったので、今回参加してくれた若者たちを今後巻き込みながら、さらにいろんな若者に会える機会をつくっていくことは必要なんだなと思っていて、出会えば会うほど若者が思っている考えとかが聞けるので、それを私たちがいかに事業化だったり何か形にするというところに尽力できればいいのかなと思ったので、4月以降、彼らにできる限り継続して参加していただきながら、さらにまた新し

い人たちも巻き込んでやっていけたらと思います。

あと、今回商店街の理事長さんだったり、東洋百貨店の方から、実際に何か起こしたい事業、何かやりたいとき、こういうふうにやれば、もしかしたら何か動きができるかもしれないということもお話が聞けました。何かやりたいと思っけていてもお金の面だったり、場所の問題で悩まれて動けないみたいなことは少しは改善できたり、やってみようという気持ち、若者にも出てくるのかなと思ったので、まちで何かやりたいとか、活動したいとか、動きたいという人たちに向けての情報発信は、今後も若者に向けてやっていく必要があるんじゃないかなと思いました。

○会長 ありがとうございます。それでは、新井委員、よろしいでしょうか。

○委員 僕は下見を何回かして、当日行けませんでした。すみませんでした。行きたかったんですけども。

なので、あくまでこの写真とか、いただいたご報告を受けてですが、やっぱり若者が集まる場があると、いろんな意見がいっぱい出るなというのが印象的で、こんなにアイデアってあるんだというのがすごく思ったことです。逆に言うと、もっと若者たちを巻き込んでいろいろしていけば、もっと桁が違うぐらい出てくるんじゃないかなとか思っている。だから、もしかすると全体の方向性として、最初、若者とはというターゲットの話とかが出ていたかと思うんですけども、この若者が抱える課題観とかが多様化していく中で、やっぱりそこに対して丁寧に接続していくことが大事かなと思っているんです。

そうやっていろんな若者たちが、場があればいっぱい発散してくれるし、アイデアをくれるし、動いて実行するかもしれないけれども、やっぱりそういうたくさん課題を包摂できるような場というか、プラットフォームというか、そういう形が最終形態であると。多分、結局こうやって最大公約数でこれを立てるとこれが駄目だったとなって全体として丸くなっちゃって、何かよく分からないことになるというのは、若者に限らず、行政的な動きというのは大体そういう批判をされていますけれども、そういう中で、これを立たせても立ち続けるとか、そういったスキームが構築できるような仕組みないしは基盤みたいなものがあると、若者が思う存分楽しんで活動できるんじゃないかなと思いました。

○会長 ありがとうございます。もっといろいろとご意見を伺いたいんですが、ちょっと時間に限りがありますので、最後に、林副委員長から補足やご意見をお願いしたいと思います。

○委員 私は世田谷区民じゃないので、下北は通勤で通るだけみたいなのところがあるんで



すけれども、何回か行ったことがある中で、本当にまちが変わっていているというのを今回感じる事ができました。最後の振り返りのときにも話させていただいたんですけれども、今回、若者の視点でとか若者とともにというところの中で、一方で私が感じたのは、下北沢の商店街とかその発展に若者の声が反映されてつくられているわけではないんだろうなと。ある意味、今回できているミカン下北も京王電鉄がやっている事業ですし、ボーナスストラックとかも、私は経緯をちゃんと分かっていないんですが、小田急線の跡地だったりというところを考えると、大手のデベロッパーによってつくられているものだったりするのかなと思うと、若者の声を反映するというのはどういうものなのかなと。特に商店街は行政がというよりは民間の取組なので、そこに協議会がどう関わっていくのかというのは難しい部分はあるのかなと。

東洋百貨店さんみたいに、100万円で出店ができるようなスペースを提供するというのは、ある意味、そうやって若者をサポートしているという民間の取組があるからこそ、そこに引き寄せられた人たちがそこで成長して、新たに出店を自分で設け、広げていくというその新陳代謝が魅力があって若者を引きつけていたり、それが先ほどから出ている古さと新しさの融合みたいな感じになっているのではないかなと思っています。

そういう意味では、今回参加した若者が、下北でどう若者の声を反映することができるのかということが課題になるかと思います。商店街側もそこを求めているかどうかちょっと分からなかったのも、もっと若者に来てほしいとかと言われているのか分からないですけれども、場合によっては今後、他の商店街での検討も必要になるのかなと思っています。

とともに、先ほど明石委員も言われていた土地の有効活用というところで、計画道路のために収容されている土地がフェンスで囲まれていて、それが虫食い状態で結構いっぱいになっていて、そういった場所をもし世田谷区とかが管理しているのであれば、昔のオルパのように、一定期間、若者解放区じゃないけれども開きますよみたいなことを今後やっていくのもありなのかなとか、今日、話を聞きながら感想を持ちました。エリアによってきっと若者の参加の仕方とか、声の反映のさせ方もいろいろとあると思うんですけれども、できることもあればできないこともあります、やっぱり世田谷は可能性があるなというふうに感じましたというちょっと雑駁な感想です。

○会長 どうもありがとうございました。

下北沢というと、私の場合はコンパのまちだったんですね。数年全く行けていないんで

すが、さっき話にあった青い椅子は国士舘大学の理工学部の学生がつくったんですね。使っていない一部分を国士舘にもらったんですけれども、あそこに色を塗って置いてあるので、ああいう学生たちも中に入っていればいいなと思うんですが、授業の一環でやっているの、そこまで思いがあったかどうか、これから下北沢に参画していこうという思いがあったかどうか分からないですね。

ということで、前回協議会ではモデル事業に参加する若者へのインセンティブ、参加しやすい仕組みづくりのお話が皆さんから出されたんですけれども、今回の取組について何が対応されたかということ、伺いたいと思うんですが、事務局いかがでしょうか。

○山本若者支援担当課長 今回の取組について、事務局として工夫した点をご説明させていただきます。

前回協議会でも、若者がただのボランティアで、無報酬で参加というのはなかなか難しいのかなというお話がありまして、参加いただいた若者に交通費相当として報償費を2000円お支払いしているということをしております。今後の取組におきましても、やはり若者にも無償ではなくてこういった形で、今回3時間余りご参加いただいて、やっぱり意見をいただいて、こういった取組に協力をいただいているという立場でございますので、報酬を支払う予定としてございます。

○会長 ありがとうございます。

それでは、これから全体討議に入りたいと思います。その前に、私から補足説明をさせていただきます。第1回協議会では、今期テーマである「若者とともに変わる地域～若者の視点で」についてご議論いただきました。第2回の協議会では、学校、商店街でのモデル事業案を受け、まずは小さな取組でも実施してみること、そこで得られた知見を基に、またその次のステップを考えていくとのご意見を多数いただきました。その後、小委員会で検討を進め、早速現場に出て、先ほどから報告されております出張アップス、まちあるきを行ったということで、その実りある報告をいただきました。これからの全体討議では、これまでの検討により見えてきた展望や課題について、皆様からご意見やアイデアをいただき、今後の小委員会でのモデル事業の具体化に向け議論していただければと考えております。

では、ここから討議に入りたいと思います。「若者とともに変わる地域～若者の視点で」実現に向けたモデル事業の実施について、皆さんからご意見をいただきたいと思っております。

それでは、渡邊委員、よろしいでしょうか。

○委員 世田谷少年センター所長の渡邊と申します。警察の立場なので、今取り組まれていることに対して具体的に何か申し上げるといことはなかなかできないんですけれども、私が最近考えている中で、やはり今日皆さんがお話になっていたような若い子たちの居場所というんですか、場所、場というふうにも先ほどおっしゃっていましたが、すごく必要で、ただ、これは私たちの悩みなんですけれども、どうその場をつくっていつて、また私たちはその場につなげていくのかというのを課題に考えております。

何でこういうことを考えるに至ったかといいますと、この中で「トーヨコ」という言葉を知っていらっしゃる方はいますか。半分ぐらいですかね。具体的に字で書くと「トー横」なんですけれども、これは場所のことなんです。歌舞伎町の東宝シネマというゴジラのモニュメントがある、昔のコマ劇ですね。あの裏手の道をトー横と呼んで、そこに居場所のない若者、特に女の子を中心に中高生が集まっていて、いろんな事件がおととしぐらいから頻繁に起きるようになっていきます。これは、直接このエリアの問題ではないんですけれども、トー横という場所には都内各地域からも、全国からも子どもが集まってきていろんな被害に遭っているということで、警視庁としても、これは今、少年部門の最重点課題の一つとしています。

私たちが世田谷で、渋谷なども中心に補導している少年センターなんですけれども、新宿には新宿少年センターというのがあるんですけれども、そこだけでは対応し切れないということで、深夜などに一斉に補導するというのでその場に行ったりするんですが、やはりそこで扱った子どもたちが、何でここに来るのという話を聞くと、家にも居場所がない、学校にもいじめられて行きたくないという子たちなんです。それで、保護したり、親御さんに来ていただいて身柄受けということで引き渡したりするんですけれども、結局、何度引き渡しても戻ってきてしまうという状況です。つい先日も一斉に補導を深夜にやってきましたんですけれども、やはり何度補導されてもそこに行ってしまうと。何でそこに行くのかというと、私の話を聞いてくれる人たちがいると。

ただ、私たちに言わせれば、その子の話を聞いているのは、性の対象にしたり、お金を求めたりというような下心がある悪い大人なんです。ただ、それがあつたとしてもそこに行ってしまう子たちがいる中で、今日お話を聞いていて単純に思ったのは、学校チームの方々の取組で、学校にこういう場所があるというのは1つその子たちの居場所にもなるのかなと思うんですけれども、いざ、今度私たちがここにどうつないでいくか。ここがあ

るよ、ここに行きなさいというのは簡単なんですけれども、そこからちゃんとつなげるのかと、そういう課題もあるんじゃないのかなと。場所があるのは今回分かったので、まさに中学生の年齢の子なのでつないでいきたいなというふうに思ったりするんですが、そこに継続してどうその子たちをつないでいくか、その子たちの本当の居場所となり得るのかというようなところなんです。居場所、非常に大切な問題で、こういった取組は非常に大事だと思うんですけれども、私たち自身は居場所をつくれるような機関ではないので、皆さんがつくっていらっしゃるこういった居場所にうまくつないでいきたいなと。うまく皆さんからもサポートをさせていただいて、うまくそこに乗せていきたいなというような気はしているんです。

すみません、雑駁な取り留めのない話だったんですが、今私たち警察の問題意識として、場所の問題と、そこにどうつながっていくか、そこにずっとその子たちをとどまらせて危ない場所に行かせないかというのが課題なものですから、お話をさせていただきました。

○会長 どうもありがとうございました。ぜひ今までの各委員の報告についての感想とか、そういうことでも結構でございますので、一通り伺ってから、また皆様からご意見をいただければと思います。

区議会議員の方からよろしいでしょうか。

○委員 いつもありがとうございます。このところ小委員会の傍聴にも行けなくて、3か月ぶりの協議会で一気に進捗していてとてもびっくりしたのと、その中身が本当に実践的すばらしいなと思いました。特に学校チームの取組がすごく大切だと思っていて、先ほど渡邊委員もおっしゃっていましたが、行政が主体となって様々居場所をつくったり、子どもたちが来てくれればよいなと思って、ただ、それは大人目線で、あるいは行政の都合でつくったものはなかなか子どもたちとフィットしなくて、うまく機能していなかった、あるいはつながっていなかったらと思う中で、そことその子どもたちをつなぐためには、その子どもたちとそこが接点を持っていかなきゃいけない。それはやっぱり学校なんだろうし、カフェという取組が本当に機能するんだなということがよく分かりました。これから継続されるんですか。定期的にといいか、できたら常設みたいな、もちろん船橋希望中だけじゃなくてというのもあったらいいのかなというものは思いました。

それで、今度つながった子たちが新しい居場所に行くんでしようけれども、それは青少年交流センターだけじゃなくて、もしかしたら児童館なのか、あるいは図書館とか様々あ

ると思いますし、今回この商店街チームがやろうとされている商店街での交流の場だったりとか、あるいはもしかしたら若者が起業した場所なのかも分からないですし、いずれにしても、若者の目線で、若者の発想で、若者が主体的に考えてつくった居場所というのを吸い出して、それを我々大人が後押ししていく、それを実現していくというのが本来なのかなというのは思いました。

そういう意味で、今回、若者をホームページ内で募集して、集めてやられたというのは本当にすばらしかったなと感じました。

○委員 お疲れさまです。すばらしい取組を聞かせていただきまして、ありがとうございました。特に学校なんかは、やりますよと言って来る子はまだいいんでしょうけれども、やるよと言われて行けない子が大事なんだろうなと思うんですね。なので、そこに行くまでが時間がかかるんだろうなと感じるんですけれども、そういう環境をどうつくってあげるのかなというところを感じました。

また、商店街なんか非常に楽しいことが行われるということが、僕も下北はもうこの頃は行くような年でもないのではなかなか行ってもいないんですけども、ちょっと見に行きたいなと思いました。再開発をしていますから、どんどん道路予定地とかができてきちゃっているわけですが、現実に空いた期間を使えるような条項をつくっていくというのは私たちの仕事だと思いますので、これまた一緒にご相談しながらやっていきたいと思えます。

これも先ほどお話があったとおり、やっぱり手を挙げてくれて、来てくれる子というのはやっぱり目的観を持ってやってくれている子。でも、その子たちから、自分たちの同じ世代がどうつながっていくのか、どうそこから広がりがあるのかということが、この先どう見えてくるのかなと。同じ世代が、私たちでは見えない世代がもっと先を見せてくれるような、つながってくれるような、その意味で、まずは手を挙げて目的観を持って活発な若者がまず始めるというのは大事なんでしょうけれども、その先をどう引っ張れるのかなということが、それはもう頭をひねらなきゃいけないのかなという感じがしました。

ともかく若者たちが、自分たちの発想で自分たちの世代を糾合していくという場はどうできるのかなということが、僕らの考えるところなんだろうなというふうに実感いたしました。第2回、第3回、どういうふうに広がりをつけられるのかというのが楽しみです、尽力していきたいと思えますので、よろしくお願ひしたいと思えます。

○委員 今日は遅れてしまいまして、大変申し訳ございませんでした。お話、大変楽しく

伺いました。

学校の件に関しては、私は前も申し上げたとおり、実はこれはすごく必要なことなんだろうと思っていました。やっぱり保護者の方などのお話を伺っていても、校内フリースクールみたいなもの、名称は別なんですけれども、そういったものがあつたらいいなという声は結構来ていて、子どもによっては、小学校も中学校も保健室が居場所になる、安心している場所であるとかそれぞれあるんですけれども、別にここにいらっしゃいと常設している場所ではないので、やっぱり見つけられない子はなかなか学校に行けなくなる。行っていたとしても、すごく楽しく行っているわけではない。そんなこともあるので、やっぱり今回の出張アップスというのは、今回1日なので告知も踏まえ、あとやっぱり部活動が本当に忙しいので行きづかった場合もあるけれども、実は必要なのかなとは思っています。

実際、世田谷区内の中学校でもやっているところがあつて、私はまだ視察には行けていないんですが、お話を伺ったり、パンフレットを作っているんですね。そのパンフレットなんか見る限りだと、中学校なんですけれども、居場所をちゃんと確保している。廊下とかでもいたければいられるようなしつらえをきちんとしているということがあるので、求められていることだと感じました。なので、いろいろ試行錯誤があると思うんですが、継続していただけたらうれしいなと思いました。

あと、下北沢のまちあるきのほうに関しては、私も何度か、最近、下北が面白いので伺っているんですけれども、あそこ自体若者の声を反映しているのかと私もちょっと思っていて、すごく全部店の単価が高かったのが、行ける人は結構ハイソな方じゃないんですけれども、だろうなど。ただ、歩いていて気持ちがいいとか、東北沢まで、世田谷代田から2キロ弱ですか。そういう意味では、デートの場所とか遊ぶにはすごくいいんだろうなと思いました。

ただ、あそこは官、いわゆる小田急、京王と、プラス世田谷区も入り、地域の方の声はすごく聞いている場所だと私は伺っています。電鉄会社が勝手に再開発した場所ではないという意味で、そういうことを若い方々も含めて、地域の声で出来上がってきたことがたくさんある、変えられる可能性があるという事例にはなり得るのかなと思っています。

あともう1個、京王線が100万円、出資金？

○委員 京王線ではなくて、東洋百貨店というところが。

○委員 そういうことですね。それはすごくびっくりしたんですけれども、すぐ近くの松

陰神社商店街なんかもお話を伺うと、やっぱり大人が投資しないと若い方は来ない。ある程度この場所を安く貸しますとか、そうしないと結果的に商店街の中というのはどんどん売って住宅になってしまうので、そういう意味ではお金出さなきゃいけないんだろうなというような気はしています。なので、若者の可能性もすごく感じるので、もしかすると下北だけではなく、もっとほかのところでもできたら、いろんな視点で楽しいかなと感じました。

○委員 小委員会の皆様、それから今回実証実験に参加してやってくださった皆様、本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。

最初に、商店街のほうの取組で、俳優の方の名前が出てきてすごくびっくりしたんですけども、潜在能力が高いなとか勝手に思ったんですけども、来週もパブリックシアターに見に行くつもりなんですけども、本当に地域に根差して、衣装のことを取り組んでやっていらっしゃるといのは前から存じていたんですけども、それを使って、若者は本当に安く買えたり、あるいは無料で何か交流しながら服の交換とかができるように、そこに大人の力をちょっと、大人の財力をちょっと入れながらのビジネスという発想はすばらしいなと思いました。なので、ぜひともそういうことが発展して、成功事例になったらいいなと思いました。

それから、学校カフェなんですけれども、自分の中学校時代を振り返ると、私は体育会系でずっと学校外だったんですけども、もう運動ばかりやっていたので、学校に何かがあっても一切振り向く余裕はなかったみたいな、だから、そういう子もたくさんいる。だから、誰がターゲットなのかなんですよね。学校内の部活をやっている子たちも立ち寄れる時間はあまりないと思うんですけども、そうかといって、先ほど渡邊委員の報告にありましたように、ト一横に行っちゃってちょっと補導されてしまうような子たちが寄れるというか、そこにつないでも……、みたいな気がするんですね。

なので、学校カフェはもちろん、そういうほっとする場所があるのはすごくいいと思うし、それはもう常設に向けてやってほしい、そういう子たちもいる、ニーズはあると思うんですけども、じゃ、本当に補導されてしまっ、本当に居場所がない子たちはどうしたらいいのかという、やっぱりピアカウンセリングといいますか、自分も元そうだったよとか、今そういうふうになっちゃっているんだよという子たち、ピアな子たちとちょっと先輩みたいなのが集まれるような場がまた別に必要なのかなと思いました。それは行政がちがちでやるというのはなかなか、また、そうなるハードルが高過ぎて誰も来ませんみ

たいなね。なので、子ども・青少年協議会みたいなところの力も発揮しながら、また別の場所が何かできないのかなと。今回行政が若者に2000円報酬を出したということでしたが、一層のこと、そういう子に君がやりなよ、2000円もらえるよみたいな、そういうものを何か立ち上げられないのかなというふうに、ちょっとこれは突飛もない感想なんですけれども思いました。いろいろ楽しいことが進むようで、すごく期待したいと思います。また、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

○会長 どうもありがとうございました。

皆さんのご意見が出てきたわけですが、全体の意見でこれは言っておきたい、こういうアイデアが出たらもっとこの小委員会の活動が活発になって、若者を引き寄せることができるんじゃないかというようなことを、時間がまだございますので、手を挙げてお話ししていただければと思います。いかがでしょうか。

先日、冒頭で申し上げました世田谷区の教育総合センターへ行ったときに、不登校の子どもが非常に多い高校の先生たちがいろんなアイデアを出していたんです。そこで、我々がやっている学校カフェがあったらいいということを行った校長先生がいました。そのときに、その学校は普通科高校なんですけれども、都立園芸高校から校長先生が来ていて、園芸高校で作った作物、野菜とかいろんなものを学校カフェで売りたいと。それで、その陶器については、世田谷総合高校がありますね。あそこは陶器を焼く窯があるんです。そこで作ったものを使いながら、園芸高校の生徒が作った野菜あるいは果物等を置いて、アルバイトはその高校生がやるというようなことをアイデアとして出していた先生がいます。

それから、世田谷の総合教育センターに日本女子体育大学のダンス部の学生たちが来ていまして、子どもたちにダンスを教えているんですね。非常に楽しそうにやっていました。ここは高校生も行けますので、どういう施設か1度行って見て、官製の施設で物すごい施設なんです。ぜひ1度見ながら、皆さんのアイデアをさらに加速させていければいいなと思っております。

さあ、私が話すのではなくて、皆さんからご意見いただければと思いますけれども、どうですか。

○委員 校内カフェについては、中学校、今、会長が言われたように、高校を含めてやりたいところがやれるような体制をつくっていければいいのかなと思っています。そう意味では、委員からのどうつないでいくのかみたいな話のところかというと、校内カフェに、ユ



一スワーカーもそうですし、あるいは地域の方がいることによって、いわゆるアウトリーチですよ。子どもは待っていても来ないので、学校の中にまず来て、そこで地域のおじさん、おばさんとかがいて、そこで普通の世間話をする中で、実はこれで困っているんだよとか、今で言うとヤングケアラーのこととか、先生には言えないけれども、このおじさん、おばさんだったら、あるいはお兄さん、お姉さんでもいいですけども、それだったら話せそうだなというときにぼろっと言う。そこから次につながっていくと思うんです。

最初から突然相談機関に行くというわけではないので、そのつながりをどうつくっていくのかというのが、下村委員がすごく丁寧に丁寧に本当にやられて、アップスはまさにそういった場所だと思うんですけども、やっぱりそういう場所をどう学校の中でまずつくって、先生以外の頼れる人がいるんだなみたいなところを、毎日つくるのはさすがに難しいと思うんですけども、そこを定期的に少しやっていくということはすごく大事なことではないかなと思っています。

ただ、そういう意味では、下村委員に私が聞きたいのは、やっていて、1回限りだったというところはあるんですけども、校長先生とかほかの先生とかの雰囲気とか、その感想というか、感触というか、あるいは参加していた中学生が、あったらまた来るよとか、その辺の感想というか、反応とかはどんな感じだったのかなと改めて聞きたいんですけども。

○委員 まず、学校の先生ですけども、以前もお話ししたかもしれないですけども、職員会議でご説明にあがったときには、感じとしては半分ぐらいの先生は関心があるけれども、半分ぐらい先生は非常に関心がないという雰囲気だったんじゃないかなと感じています。それから、継続的にやりたいということは校長先生とはずっと話をしている、先生が異動がなかったらまたやらせてもらえるという話をしていたので、また4月になったらお邪魔をしてやりたいと思いますけれども、やり方も、今回は2階にある会議室だったんです。西東京の話なんかを伺っていても、やはり中学生は忙しい、でも、ちょっとでも顔を見せたいみたいなのところもあるので、西東京なんかでやっているときも昇降口の近くの場所をなるべく選んだりとかということもあったので、逆に言うと船橋希望中だったら、昇降口を出たところの空間とかを使うこともありだなとか、まだまだその辺はいろいろきつと工夫ができるんだろうなと思います。

回数が増えると出張アップスという形では多分できないので、やっぱり地域の方たちと上手にディスカッションしながら、地域の方たちが主体、大学生なんかも含めて主体にな

っていくというような、だんだん移行していく必要はあるんだろうなど。常にうちの施設からも支援みたいな形で関わっていきたいと思いますけれども、そういうのがあるんだろうなというところです。

それから、そこに来た子が、割とヘビーユーザーの男の子なんですけれども、翌々日から食卓のプログラム、食事づくりのプログラムが、まん延防止等重点措置が解除されるので再開されるという情報をそこで知って、じゃ、友達を連れて行くみたいな感じで来ていましたので、いい意味でのインフルエンサーみたいな形になってもらえる可能性もあるし、それから1人の女の子ですけれども、多分友達がいなかったらもうちょっとじっくり話を聞いてほしいふうだった子もいるんです。さっきの友達と部が一緒なんでという話はしていたんですけれども、何となく話の雰囲気はもうちょっと話を聞いてほしそうなみたいなところがあって、その辺、今後の課題としてきちっと取り組んでいきたいなと思いました。

○委員 私の認識として、青少年協議会で対象としている青少年というのは、今いろいろ話が出ていますけれども、ト一横に行ってしまうような子もいるし、不登校の子もいるし、あるいは部活動を一生懸命やっている子もいるし、あるいは積極的に動いている子もいるというのを、全部を対象にしているんだなという認識でいろいろ議論を進めているんだろうなと思っています。

その中で、商店街に参加した大学生、あるいは高校を卒業したての人たちは、どちらかという割と積極的に世の中に打って出て起業したい人とか、中には1人、私はまちづくりに関わりたい、公務員になりたいんだという希望を持って具体的に来ているような大学生もいたりしたと。だから、対象とする子どもは非常に広いんですね。そういうふう認識しています。だから、どれかに絞るといのはなかなか難しいのかなと思っています。ただ、まちづくり、商店街プロジェクトのほうは、恐らく今後どういう形にしろ、若者の意見を吸い上げてやるにしても、割と積極的に前に出てくる青少年が来るのかなという気はしているので、上手くつなげないかなというような印象を持ちました。

○会長 ありがとうございます。キーワードは「つながり」ですね。そういういろんな子どもたちとの。

○委員 つながりです。

それからもう一つは、いろんな方から出ていますけれども、場ですね。居場所、具体的な場所なのか、ネット上の場所なのか分かりませんが、そういう場所があるという

ことが非常に重要だなと思います。

○会長 その居場所も、ほっとする空間、これは若者も我々も行けばほっとすると。そこに参加すればほっとするという居場所ですよ。

○委員 はい。私は大分年上というか高齢なんですけれども、若い人たちと話していると、先ほど会長も話していたように、こちらも若返りますので非常にいいことだと思うし、私の同世代の人間は本当に時間があるんですよ。持て余している人もいっぱいいますので、そういう人を活用するのもいいのかなと。お互いにいいんじゃないかなと思いますね。若い人にとってもいいし、高齢者にとっても若い人の意見を聞けるし、若い人には高齢者の経験とかそういったものを伝授できるし、そういった場があればなというふうには思います。

○会長 ありがとうございます。積極的なご意見です。

○委員 委員の話聞いて思い出したんです。ピアサポートですよ。何度か話が出ています船橋希望中学校でのまなBASEの取組というのがあるんですけども、船橋希望中を卒業した大学生たちが中学生の子どもたちに向けて勉強を教えているという取組があるんです。中学生に教えている大学生には、その日に2人ぐらい入るんですけども、その方には幾らかの交通費程度のお金を払っていると。それでも、そのほかの方も来てもいいということになっているので、そのほかの大学生もやっぱり来るわけですよ。そうすると、一緒に勉強を教えるんですけども、大学生の集まりで、そこが大学生たちの居場所にもなっているということなので、ちょっと先行く先輩の方々の話を中学生も聞けるし、そこに集う大学生も、やはり自分たちの居場所として機能しているということで、すごくいい取組だなと思っています。

先ほど势能委員が言われたように、今回希望を持ってできる若者たちが多分集まってきていると思うんですけども、その若者たちが核になって、ピアサポートというか、次の世代の方々を引き上げていくような、そういった活動になれば、いろんな多様な子どもたちも一緒に場をつくっていくことができるのかなと思いますので、ちょっとメンター的な若者を育てていくということも、1つ直接的に多様な子どもたちに手を差し伸べるだけではなくて、その間に入っていき若者たちを育てていくということも、今回の取組を見ていて何か希望が見えたなという感じもいたしました。

○会長 ありがとうございます。いかがでしょう。若者が核になるという働きかけをしていこうというようなことですね。核になるということであると、若者委員は今のご意見に

対していかがですか。

○委員 私もアップスでインターンをしていて、利用者さんが同世代とか、あとは中高生の方が多いので、やっぱり年齢が近いからこそ話してくれるなということは結構経験としてもあるので、間に入ることにはすごく意味があるなと思っています。ただ、いろいろ若者はやりたいことが今の時点でもこんなにたくさん出ているので、それをどう寄り添っていったらいいか、どうやって実現の形に、どこまでこの事業としてやっていけるのかなというのを考えると、やっぱりやりたいことができる場所というのをまずはつくったほうがいいんじゃないかなって私は思いました。

例えばこの資料のところにも私の意見が書いてあったんですけども、コミュニティは、最近ではSNSとかオンライン上でつくるのもコロナになってから主流になりつつあるんですけども、やっぱり私の大学の周りの友達とかを見ていると、直接同じ目的を持って、例えば最近だったら若者の間で結構シーシャというおしゃれなバーみたいなカフェみたいな、水たばこみたいなのはやっているんですけども、そういうのとかを、例えば「シーシャに行く」という目的を持った若者が、同じバーとかカフェに集まって、そこでほかにもこういう共通点があったというのを話していくうちに見つけるということがあるので、やっぱりオンラインだけではできない場づくりとか、それこそ居場所が、直接会うからこそできるんじゃないかなと思っているので、何か解決できる、やりたいことを後押し、1人でやろうと思っていたらできなかったことも、後押ししてもらえる場所があったらいいんじゃないかなと思いました。

○会長 ありがとうございます。やりたいことができる場所というのは居場所につながっていくのかなと思います。ほかにいかがでしょうか。

学校チーム、商店街チーム、どちらでも混在して構いませんので、討議時間はあと15分ございます。

○委員 今後なんですけれども、例えば学校チームの場合、今後どうやっていくというのは、また今度討議するんですか。出張アップスというのは、アップスが出張するというアップスの事業だから、ここの青少協のモデル事業としては、どういうふうにそれをモデル事業化していくかということかなと思ったんですけども、また今度討議するということなんですか。

○会長 はい。

○委員 分かりました。

○委員 あるとすれば、出張アップスだけじゃなくて、校内カフェをどう区内で広げていくのか、そのためにはどういう施策、事業が必要なのかというのを今後の小委員会等々を含めたところで議論していくということをする必要があるのかなと。ただ、繰り返になりますけれども、来年度の夏ぐらい、もう三、四か月後の夏ぐらいまでにそこを議論しておかないと、1年後、実施事業をするためには予算の問題もあるので、その議論はきちんとやらなければいけないのかなと思っています。そのための議員の方にもいろいろとご理解していただきながらということ、後押しはやっぱり必要だなと思っています。

○委員 私は、予算のことはちょっと分からないので、私が気になるのは、地域の人といっても、私が個人で今青少協で委員だからと関わっただけなので、そうすると、地域でどういうふうなメンバーで組織を考えていくかというのが、気になるんですね。だから、そこはまだ今後でいいんですね。

○委員 どういう人だったら参加しやすいのか。今日、欠席されていますけれども、青少年委員さんとかもこのメンバーにもいらっしゃいますし、もちろんPTAの方とかもいらっしゃいますので、全ての中学校とか高校でやってほしいですけれども、やれるとは思えないので、例えば5か所だけ手挙げ形式でやれるような形を事業化するとかというのは、今後の議論の中ではきっとできると思うんです。そのときに、地域のNPOが入るといった話もちろんあると思いますし、アップスとかが入ってやるという例もちろん出てくると思いますので、そこはいろいろ可能性を含めながら、これだったらできそうなのを議論の中で詰めていければいいのではないかなと私は思っています。

○委員 社協さんってどうなんですか。私、この間、社協の地区サポーターに登録したんですけども、最終的には災害があったときに、元気ですかというボランティアをするという話を聞いて、まだ実際はやっていないんですけども、そういうのも事務局の方がいろいろ調べて考えてもらって相談をするということでもいいんですか。

○委員 私は主任児童委員で、まさに地域の人ですが、地域の中でできる地域とできない地域があると思うんですけども、いろんな社会資源があるので、その中で、その地域にはどういう人がいるかというのは、また改めて話していく中で、民生児童委員、主任児童委員、社協、いろんな方がいるので、その中で組織だってくると思うんですね。

ただ1つ気がかりなのは、先ほどおっしゃったように、校長先生によっては続けられるかもしれないという、そういう不確定な学校カフェという運営はどうなのかなという、校長先生次第というのがちょっと引っかかるかなという感じはいたしました。

○委員 実は昨年度のときに、やっぱり青少協として校内カフェをやりたいという話は1回、校長先生に区の方が話にいらっしゃっているんです。そのときには、校長先生はお断りをされているんです。だから、何をやるのか学校としても見えやすい形にしていかないと、校長先生の突破が難しいし、ほかの教員たちの突破はさらに難しくなってしまうので、そういう意味で、アップスを活用したというのが今回のモデル事業なんだと思うんです。

だから、割と関係性があるところから、名前は出張アップスですけども、実際にやっていることは一緒なのでそういう形で、あとは校長先生と話した中では、そういうのが今の段階でいいと思っている校長先生は、多分少数派だと。ただ、そういういい例が幾つか出てくると、くるっとみんなやろうよという雰囲気になるところもあるのでというお話があったので、それで、どちらかというともまずとにかく1校をちゃんとやる。それから2校、3校と、例えば池之上とか野毛なんかも活用しながらやってみる。場合によっては、ユースワーカーは少し少なめで、地域の方を多めのモデルもやってみるみたいなところで事業化がだんだんできてくればいいなというところです。

○会長 ありがとうございます。その学校というのは、中学校ですよ。

○委員 中学校の話です。

○会長 いかがでしょうか。副会長、今までの話の中でお感じになったことを。

○副会長 小委員会の委員長をさせていただいております、この半年、本当に、今日も活発に小委員会の皆さんにご意見をいただいておりますけれども、支えてきていただいております。本当にありがとうございます。今日のお話の中では、小委員会の報告を経て、この協議会の皆さんからまたさらに意見をいただいて、来年度4月以降、小委員会をどうしていこうか悩んでいるところです。

まず1つ目ですけども、学校の取組、モデル事業につきまして、恐らくこれは同じ世田谷区の中においても、それぞれの学校の学校区の特色というのがあるかと思いたすので、それをうまく利用して進めていかざるを得ないんだろうと思います。学校カフェの取組というのは必要不可欠な取組なんだということは、今回のモデル事業を経て再認識させていただいた次第です。

今回、私は世田谷区の子ども・青少年協議会には学識経験者という形で参加させていただいておりますけれども、地元に戻れば北区の小学校のおやじ倶楽部のメンバーなんですね。ちょうど先週の土曜日に、おやじ倶楽部の今年度の総会がようやく対面でできて、お

やじ倶楽部のメンバーの方々といろいろと意見交換をしたんですけれども、このコロナ禍において経済的な格差が拡大しているというのは明らかなことであって、それが子どもたちの経験格差になってしまっているという意見が親父たちの中から出てきました。

おやじ倶楽部がやろうとしているのは、おやじ倶楽部のメンバーである以上、我が子も、この学校に通っている子どもたちはもうみんな同じ子どもなんだと。だから、その子たちに対してできることを、こういう状況だけれども少しでも何かできることを探して経験させてやりたいというまさに親父心みたいな、パターンリスティックな見方をされている方々がいらっしゃるんですけれども、おやじ倶楽部が一生懸命活動することによって何とか経験格差をなくしてやりたいという、そんな思いの中で活動をしています。

ですから、そういうところは、例えば学校カフェをやるにしてもおやじ倶楽部というところが大きな1つの核になるかと思えますし、実はおやじ倶楽部のイベントと申し上げても、おやじ倶楽部単体でやっているものではないんですね。北区の小学校の場合ですと児童館、それからPTA、そして先ほどお話に出てきました社協のコミュニティーソーシャルワーカーの方々とは必ず一緒にやっていくということになりますので、そういったそれぞれのやりたい、やっていただけるといふ学校の地域の方々共同して学校カフェの取組というのは続けていかなければならないだろうと思いました。

先ほ委員から、保健室のキーワードが出てきました。保健室登校というのは全国的に言われているところですね。学校には行けるんだけど教室には入れない。けれども保健室には行ける。それを保健室登校と言っているわけですがけれども、学校カフェ登校という取組を世田谷区発でやったらどうですか。全国に対して、保健室登校じゃなくて、地域の方が支えている学校カフェに登校する。恐らく校長先生の中には、そんなのとんでもないという話も出てくるかもしれませんが、1つの居場所の在り方として、大いに世田谷区発のメッセージとしてあり得るのかなと思って伺っていた次第です。

それから、もう一つ世田谷区の今回のモデル事業の取組で皆さんに支えていただいたのが、商店街の在り方、商店街のモデル事業ということで、多くの方々に参加していただくことができて本当によかったと思います。その中で今日のご意見にも出てきていましたけれども、下北沢が非常に変わってきて、変わってくる中で子どもの姿が見えなくなってしまうという、これは子ども・青少年協議会としていかなものかなとちょっと気がかりになりました。そして、当日私は行けませんでしたけれども、障害のある方々の姿はどうでしたか。やっぱり障害というようなこと、要は子どもであれ、障害であれ、生活のしづ

らさを感じている方々が商店街の中で生き生きとできるような、そういう商店街ということとを若者と一緒に考えていっていただきたいなというのをつくづく思います。

今日、委員からト一横の話が出てまいりまして、これも非常に、聞いてしまった以上はやっぱり何か考えていかなければならないということを感じた次第です。ト一横に集う子どもたちにとってのニーズというのは、いわゆるトゥエンティーフォーセブンというやつですね。24時間7日間なんですよ。そこに学校カフェが対応できるかというできないでしょう。そうすると、例えば下北の空き店舗の中に、トゥエンティーフォーセブンでそういうニーズのある子どもたちが行けて、そこにはなるべく年齢の近い、話の分かってくれるお兄さん、お姉さんがいてくれたりとか、そういうところの運営を地域の方々と一緒にやっていく、そしてそこにカフェ的なものか何か分かりませんが、必要とされているものがあれば、それもまた1つの商店街の在り方としては、まさに若者と一緒に何かしていくという意味では大事な視点になるのかなと思っておりました。

先ほどの委員の話の中からも出てきていましたけれども、いわゆる性被害の問題等々がありましたが、しあわせなみだという性犯罪の被害者の方々を支援されているNGOとかNPOとか、割と東洋大学の卒業生が関わっているところがあったりとか、障害のある方々に対する、まさに日本の性教育じゃなくて、世界のスタンダードの性教育を提供できる知識なんかを持っている方々が研究センターの中にいらっしゃるの、そういう方々とタイアップしながらやっていくということは、すごく大事なことなのかなと思いました。

その方を中心として全国調査に参加させていただいたんですけども、内容は詳しくは言えませんが、学校は教えていないことを禁止しているんですよ。そういう状況ですから、子どもたちは何を禁止されているのかも分からない状況で、駄目だというふうに一言で片づけられてしまう。それでは何を聞いていいのかさえも分からないという状況なんですよ。これが今の状況です。ですから、そういうことを何とか、まさにこの下北沢なんていうフィールドを考えると、受け止められる場所づくりということは考えられるのかなと感じるところがありますので、課題はいろいろあるかと思いますが、また来年度、来年度といっても明日からなんですけども、委員の皆さんのお力を借りつつ、少しでも前に進んでいけるような形をつくっていきたいと思っております。

○会長 どうもありがとうございました。

今日、出た中のキーワードは、つながりですね。それから若者のアイデアを大事にすることが大事だと。若者は自ら課題を見つける存在になっている。それから、商店街チーム



が最後にやったワークショップ、ああいうことでいいアイデアが出てくる、有効性が保たれると。それから居場所ですね。ほっとする空間、これは若者も大人もそれが必要だと。そういう中で社会資源の有効活用が必要であるということです。

それから、出張アップスは、まず学校カフェのきっかけをつくる、それをつなげる存在としての出張アップスということまで議論として出てきました。このような議論は非常に実りあると思うんです。この次の小委員会の議論に、ぜひこれを生かして具体化していただけたらと思っております。本日、皆様の貴重なご意見、様々なご意見が出たことを、実りある会議だというふうに総括してみたいと思います。

それでは、これで進行係を私から事務局にお返ししたいと思います。どうもありがとうございました。

○山本若者支援担当課長 会長、委員の皆様、本当にありがとうございました。小委員会での取組につきましても様々ご意見をいただきまして、また行政側からも貴重な情報などもいただきまして、非常に有意義な会議となったと思います。

次回以降の小委員会のスケジュールですが、資料5のとおり、5月12日に第7回ということで開催させていただきたいと考えております。また、本日は3月31日ということで、今年度の協議会は本日最後となります。

令和4年度から委員の構成に一部変更がございます。この場でお知らせいたしますが、専門委員の方で、今、『情熱せたがや、始めました。』運営委託事業者代表ということで n e o m u r a さんに出ていただいておりますが、事業者が変更いたしまして、令和4年度から株式会社チーム・エムツーに変更になります。代表の森嶋様に委員をお務めいただく予定でございます。本日、引継ぎもあっていらっしゃるんですが、ご紹介してもよろしいですか。

○森嶋氏 皆様、初めまして、株式会社チーム・エムツーの森嶋と申します。私は、住まいは文京区で、会社は千代田区なんですけれども、今回メインのファシリテーターに入った者がまさに下北沢に住んでおりまして、非常に世田谷に近いところというか、ど真ん中でいろんなお話をさせていただきます。今回「ねつせた！」の事業に取り組ませていただきたいということで公募にエントリーしたその思いというのは、東北大震災のときに、大学生が結構大変な時期もありまして、そのときに立教大学とフェイスブックで1000人のネットワークをつくることといったことをやりまして、そこでネット上からつながりが生まれるんだなという経験をして、そこから10年ぐらい北海道から福岡まで、私どもはどちらかと

いうと女子学生が中心だったんですけれども、そこでいろんな地域の自治体や企業様とのコラボレーションを経験させていただいて、まさにこの都会、東京の世田谷で、それを行政として非常に真摯に皆様のように取り組んでいらっしゃるところに非常に魅力を感じました。

もちろん事業としてのことではありますけれども、これまでの経験の中で何か我々もコミットできるところがあるのではないかなと思って、今引継ぎをneomuraさんから非常に丁寧にさせていただいてまして、できるだけ皆様と一緒に、新しく関わらせていただく子ども・青少年協議会の中で頑張っていけたらなと思っていますので、ゼロからですけれども、何とぞご指導よろしく願いいたします。

○山本若者支援担当課長 ありがとうございます。そして、これまで委員を務められていました新井委員ですけれども、NPO法人neomuraは区内にあります活動団体ということで、若者との共同事業に継続して取り組まれていらっしゃることも実績としてございますので、引き続き今期の専門委員をお務めいただきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

次回の協議会でございますが、次第の下と資料5にも載せてございますが、8月の開催を予定しております。まだ日時、それから会場の詳細が決まっておりませんので、決まりましたらご連絡させていただきます。

それでは、閉会に当たりまして、事務局を代表して子ども・若者部長の柳澤よりご挨拶申し上げます。

○柳澤子ども・若者部長 皆様、本日はそれぞれのご専門の立場から貴重なご意見をいただきまして、本当ありがとうございます。また、小委員会の皆様には、学校、それから商店街といった活動を通して、今日も貴重な報告をいただきまして本当にありがとうございます。

本日皆様からいただきましたご意見を基に、今後の小委員会でのモデル事業を進めてまいります。本協議会での検討もこれからまさに佳境に入っていくところでございます。先ほど予算要求のご心配もいただきましたけれども、来年度から、広汎の議論につきましてどうぞまたよろしく願いいたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。

○山本若者支援担当課長 ありがとうございます。

それでは以上をもちまして、令和3年－4年度期第3回子ども・青少年協議会を閉会い

たします。本日はありがとうございました。

午後 4 時27分閉会